

阿部彩『子どもの貧困―日本の不公平を考える』岩波書店 2008 年

第五章 学歴社会と子どもの貧困

疑問点・論点

・第五章では主に貧困世帯の子どもが低学歴になってしまう過程や背景について取り上げている。その理由として、親の経済的な負担だけではなく、成長期の子供が勉学に対して興味を示していない事を指摘しており、特に P173、3 行目にて「中学二年生の段階ですでに学力格差や努力、意欲の差が生じているのであるならば、高校以上のレベルの教育の無償化だけでは貧困と低学歴の関連を断ち切ることができない」と筆者は危機感を募らせている。貧困世帯の子供の低学歴の問題を解決するにはどのような政策を行うべきか？

A 班・・

- ① 貧困世帯のモチベーションを上げるために、幼少期に受ける保育所の教育をより徹底させる。
- ② 政府から補助として就学援助金や減免制度が出されているものの、制度そのものが穴だらけなので見直しを行う。

B 班・・

- ① ヘッドスタートという制度の世間の認識を高め、政府もその環境を整える。
- ② 義務教育での給食費などの負担を軽減させる。
- ③ 高等学校を無償化する。

C 班・・

- ① 日本型ヘッドスタートを実施したうえで、乳幼児期の貧困をなくす。
- ② 高校三年間を義務教育化ないし無償化して、アルバイト等で稼いでいる貧困世帯の子どもの学習時間を確保し、全体的に学力を底上げする。

D 班・・

- ① 保育所の無償化
 - ② 貧困世帯の子どもを優先的に入れる。
- そのうえで、アメリカのヘッドスタートを取り入れる。